

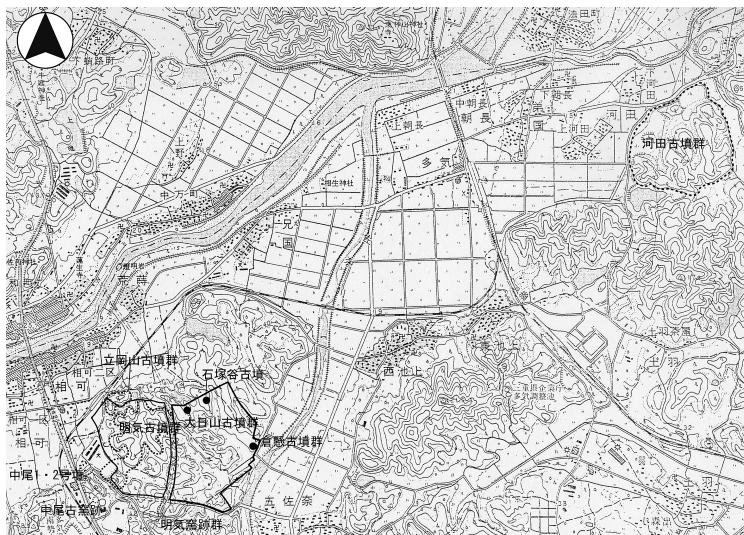
多気町相可^{たちこやま} 立岡山・明気丘陵^{みょうげ}の古墳出土資料について

山中 由紀子・大川 操

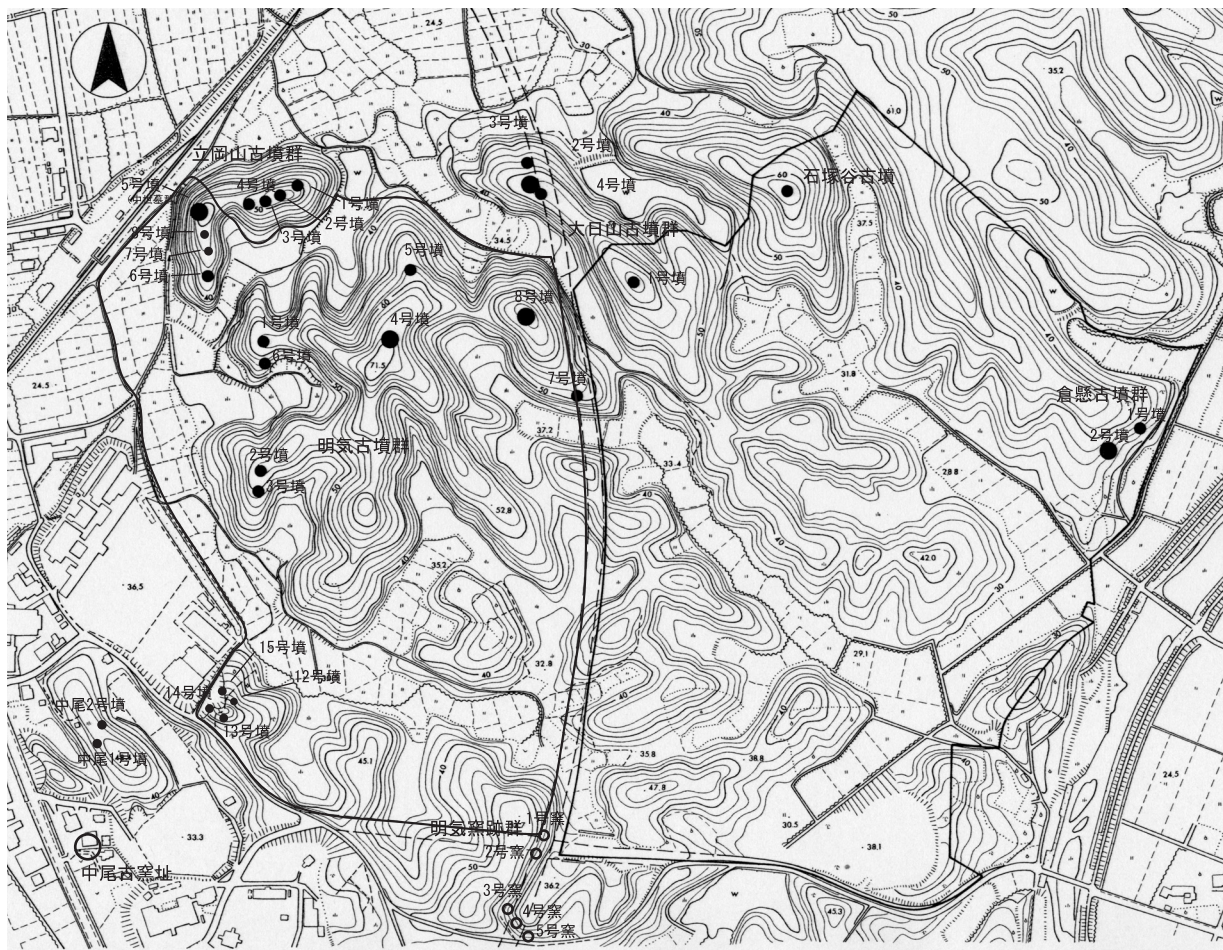
はじめに

伊勢本街道を南進し櫛田川を渡ると、多気町相可に至る。一面に広がる田園地帯を南東から見下ろす丘陵地には、立岡山中世墓群や立岡山・明気古墳群をはじめとする石塚谷・大日山・倉懸古墳などの多くの古墳群が点在する。これは町内では北東約5kmにある河田古墳群に次ぐ規模の古墳群であるが、昭和60年代に計画があがった工業団地造成・住宅団地造成・国道42号松阪多気バイパスの建設によりその大半を記録保存とせざるを得ないこととなり、多気町教育委員会を主体として発掘調査が行われた。

工業団地予定地であった丘陵北東部では、6世紀後半の石塚谷古墳から刀身に規格的に



第1図 多気町相可周辺遺跡位置図 (1:50,000)



第2図 立岡山古墳群・明気古墳群位置図 (1:8,000)

魚・鳥・日輪等の象嵌模様を施す直刀が出土し、また住宅団地となる立岡山丘陵では13～15世紀にかけての中世墓群が丘陵北西隅を中心に造営されていた。中世墓の下層、さらに明気の丘陵上には、素環鏡板の馬具を中心とした副葬が行われた古墳群が形成されていたことも明らかとなった。

これらの報告については、多気町教育委員会刊行の調査報告により公表されているが、立岡山・明気古墳群出土遺物のうち、とりわけ金属製品については、報告書刊行時に遺物の保存処理のために詳細な報告が掲載できていない。ここでは、その未公開の資料を中心に概要を紹介し、周辺古墳群との副葬品の様相について触れてみたい。

1 立岡山古墳群概況

立岡山古墳群は多気町相可に所在し、JR紀勢本線相可駅の北東に位置する。標高約50mの独立丘陵上に8基の古墳が確認されている。住宅団地造成に伴って削平される南北尾根筋上の5号墳～8号墳が発掘調査され、北西方向に櫛田川を眺望できる5号墳上には稻荷神社があり、中世墓群が展開していた。

(1) 立岡山5号墳の遺物

古墳盛土上に13～15世紀にわたる中世墓群が築かれ、また稻荷神社の設置で古墳の埋葬施設は跡形なく破壊されていた状況であった。中世墓も五輪塔や石組みなどが表土とともにかなり流出していた中で、攪乱された古墳の副葬品と思われる鉄製品が散在していた。中世墓SX5・SX6とされた5号墳南西斜面から鉈1、また8号墳の北東に位置する中世墓SX1の遺物として報告される釘(刀子)Ⅰ-3⁽²⁾(本報告2)は、古墳副葬の鑿と考えられる。

鉈1は刃先がスプーン状に湾曲し、鑢が明瞭に入る。柄木の木質が錆着する。鑿2は、やや長方形断面の茎、両角闊、頸部から刃先に向けて先細りし、刃先は欠する。平鑿あるいは鑿と考えられる。

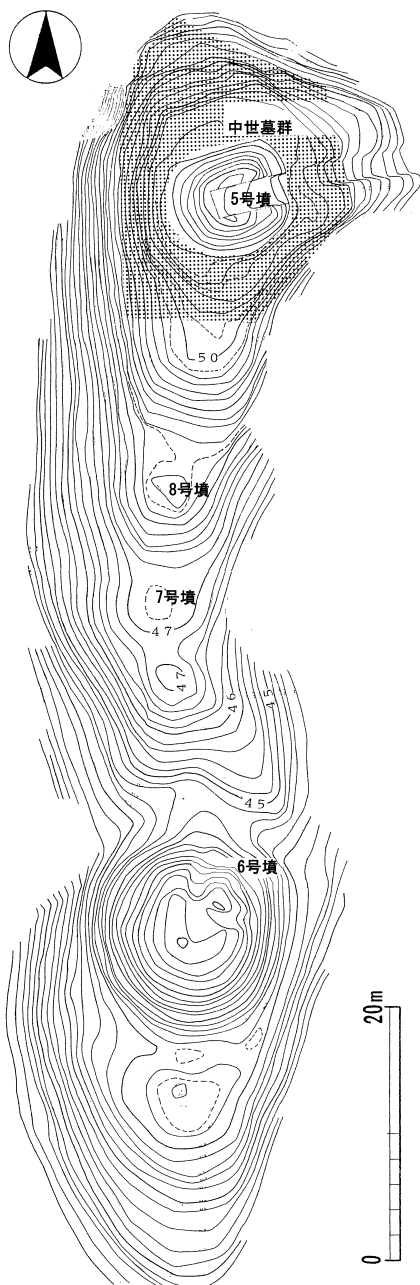
(2) 立岡山6号墳の遺物

報告書記載の副葬土器は、棺跡東方約1.5m(墓墳か)から土師器高杯脚部、須恵器有蓋高杯2点、須恵器杯身蓋1点、甕1点の一群、また棺上から須恵器杯身・高杯・器台といった組成で、田辺昭三氏の編年による(以下、田辺編年とする)MT15型式併行期に相当するものとみられる。

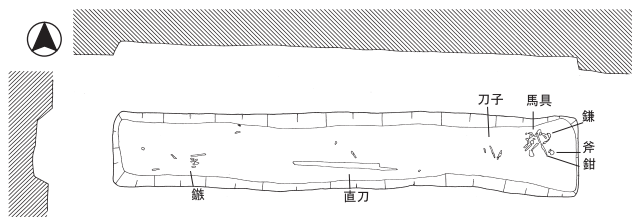
金属製品については、棺内東端から馬具、鎌・斧・鉄鉗・刀子(51報Ⅱ-3)の一群、棺東木口にあたるとされる場所で刀子(52)・丸鑿、棺内中央南壁寄りに直刀、棺西端から鍬が出土した。(大川)

馬具 43 素環部はほぼ正円を呈し、円環金具を立聞とする。轡の他に、鉄製半球形辻金具と鉤具が出土しており、面繫を構成する馬具が副葬されていたといえる。その形式から、多気町域の他の素環鏡板付轡に先行する、6世紀前半のものと考えられる。(山中)

工具 上記の轡に錆着して鉄鉗55が出土。箸先は支点



第3図 立岡山丘陵西端測量図(1:600)



第4図 立岡山6号墳埋葬施設(1:60)(報告②に加筆)

Archaeological line drawings of various artifacts from the Wuyang Tomb. The artifacts are labeled with numbers 1 through 56. A scale bar indicates 12 cm.

- 1: A long sword with a hilt and a long blade.
- 2 (I-3): A dagger with a hilt and a long blade.
- 43-1, 43-2, 43-3, 43-4: Various small ornaments and tools, including a ring, a small bell, a small ring, and a small ring.
- 44, 45 (茎 II-5), 46, 47, 48, 49: Various small ornaments and tools, including a ring, a small bell, a small ring, and a small ring.
- 50: A long sword with a hilt and a long blade.
- 51-1 (II-3), 51-2: A long sword with a hilt and a long blade.
- 52: A long sword with a hilt and a long blade.
- 53: A long sword with a hilt and a long blade.
- 54 (II-4): A long sword with a hilt and a long blade.
- 55: A pair of pliers.
- 56: A long knife with a hilt and a long blade.

– 31 –

で、柄元には皮革と思われる有機質を漆で固めた柄元装具が錆着する。刀身にも柄元装具に似た有機質が残り、皮革製鞘を伴った可能性がある。**丸鑿 54** の柄は、柄頭から皮革状有機質を巻上げた後、樹皮の下地巻きを巻き上げる。**武器 直刀 50** は切先を欠損する。身幅 4.0cm、関は棟側が斜角関、刃側が角関となる。茎尻は隅挟り、目釘孔は釘を残す 2 孔があり、中間にもう 1 孔あるかもしれない。柄元の関直下に挟りが入る。刀身・茎ともに、木質が多く錆着する。**鏃 44 ～ 49** はいずれも尖根系長頸鏃で、鏃身は三角形や柳葉となる。**48** には頸部に独立片逆刺がつく。

2 明気古墳群概況

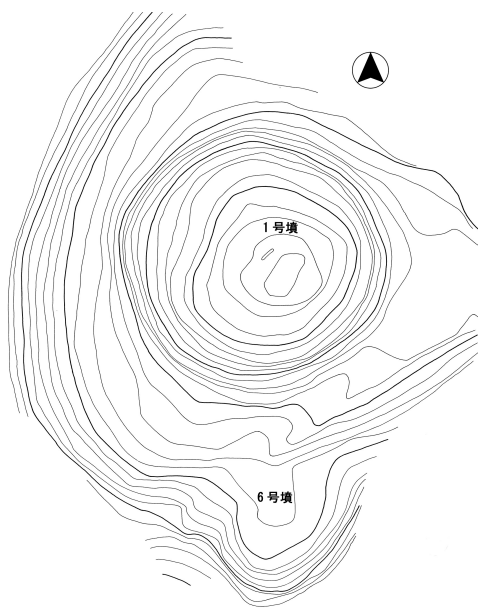
立岡山古墳群と同じく、多気町相可に所在し、住宅団地造成に伴い明気 1 号墳～8 号墳、12 号墳～15 号墳までの計 12 基の古墳が調査された。当古墳群は立岡山古墳群の南東側に対面する丘陵上に展開する 8 基と、南西側の細長い谷を挟んで、多気中学校がある北西方向へ延びる別筋の尾根上で見つかった 4 基との、計 12 基で構成される。7・8 号墳の踏査時に、9～11 号墳とした 3 基の高まりがあったが、これらは自然地形と判断された。多気中学校側の丘陵では、昭和 38 年の中学校造成時に須恵器等が出土し、4 基以外にも古墳が点在した可能性がある。

既刊の報告書では、1～8 号墳が点在する丘陵上の一群を明気古墳群 A、12～15 号墳側を明気古墳群 B とする。明気古墳群 A では、複雑に出入りする尾根ごとに 1～2 基ずつ古墳が築造されていて、7・8 号墳の発見された東支群、5 号墳のある北支群、丘陵中央部の最高標高点近くに築造された中央群、立岡山丘陵側へ突出する尾根に 1・6 号墳が築かれた西支群、これに谷を挟んで対峙する 2・3 号墳のある南西支群に分かれる。

(1) 明気 1 号墳の遺物

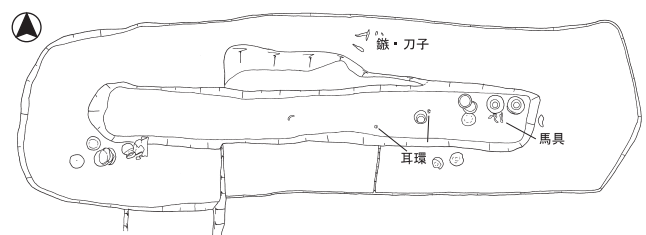
西支群の尾根において最も標高が高い地点に 1 号墳は位置する。1 号墳の副葬品は、棺跡東木口に須恵器杯身蓋、棺跡東端に須恵器広口壺と馬具、棺内から耳環が出土する。棺外墓壇内の遺物としては、棺東木口の南側に杯身 2 点、棺西木口の南側に須恵器杯蓋 2 点、広口壺 1 点、土師器丸底甕 1 点が、また棺中央の北側棺外に刀子・鏃が副葬される。さらに墓壇上副葬として、須恵器提瓶・杯身などの一群がある。これらは主として田辺編年の TK209 型式併行期に属するとみられる。以下、未報告の金属製品について概述する。(大川)

馬具轡 14 方形立聞素環鏡板付轡は立聞の幅が狭いもので、素環部鉄棒の中央につくのではなく、素環鉄棒の背面に揃えて立聞を鍛接している。なお、引手金具は向かって左側については引手壺近くで、右側は引手壺は欠損しているが全体的に振っている。⁽⁴⁾ただ、筆者の観察が甘く本来は引手の他の部分にも見られることかもしれない。(山中)



第 6 図 明気 1 号墳・6 号墳測量図 (1:400) (報告②に一部加筆)

刀子 は 3 個体出土し、**16** は茎および刀身に樹皮の下地巻が錆着する。また幅 0.9cm の鋸痕跡が観察される。背関・刃関とも斜角関である。**17** は切先を欠損するものの茎の方が長い。関は背・刃関ともに角関、茎には下地の樹皮巻と鹿角装が確認できる。茎先端は栗尻である。**15** は刀身片。細身の刀子である。**耳環 21・11** は銅芯金薄板貼。接面にたたみ込みがあるが、下地については不明。**22・10** は銅芯銀地で鍍金された可能性がある。**10** では下地を接面へわずかに折り曲げ、別蓋を被せる。(大川)



第 7 図 明気 1 号墳埋葬施設 (1:80) (報告②に一部加筆)

(2) 明気 6 号墳

1 号墳と同じ尾根上に、1 号墳の南側でやや低い斜面に築造される。東西に主軸をもつ埋葬主体部を確認している。

副葬土器は、東木口に須恵器杯蓋・杯身、西木口棺跡隅に須恵器横瓶・土師器丸底甕、棺外墓壇内には棺跡西木口の北側に須恵器高杯・提瓶・甕・土師器高杯の一群が、また墓壇東端部に土師器甕の副葬がみられる。須恵器は、田辺編年の TK209 型式併行期に相当するものとみられ、6 世紀後葉～末期にかけて築造された古墳と考えられる。

土器以外の遺物としては、棺内からガラス小玉が 2 点出土するのみである。

ガラス小玉 11 は水色不透明の小玉で、管材からの管切により製作されており、孔面から見て気泡が渦状に軌跡を描く。**12** は紫紺色の小玉で、管材から管切で切り離され、孔面も丁寧に研磨する。

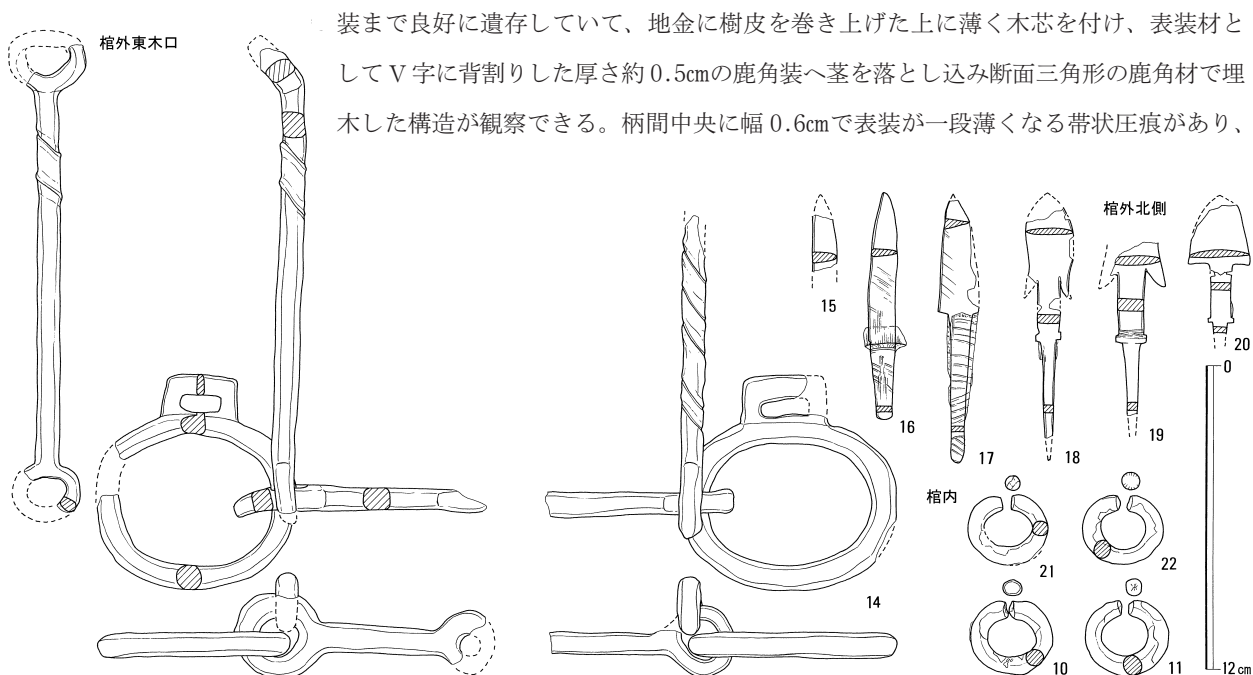
(3) 明気 2 号墳

南西支群の尾根先端に位置する 2 号墳では、過去の土取によって、古墳の西半が壊されており、埋葬主体部の東半の遺物を確認するにとどまる。

副葬土器は、すべて棺外東木口に集中しており、須恵器杯身蓋 10 セット、長方形 1 段透かしの入る無蓋高杯 1 点、長方形 2 段透かしの無蓋高杯 1 点、有蓋高杯 1 セットと高杯のみ 1 点、短頸壺 2 点、広口壺 5 点、直口壺 1 点、台付直口壺 1 点、甕 1 点からなる。一段階前の様相も甕や直口壺などに残すものの、田辺編年の TK43 型式併行期を主体とする 6 世紀（中～）後葉の造営と考えられる。

金属製品については、棺内に鐔付直刀と鹿角装短刀が、切先を棺内中央、刃部を棺外へ向けて置かれる。棺外墓壇内の東木口の土器群下から刀子、東木口北側に刃部を南西向きにした斧、棺外墓壇内の棺跡中央南側壁際に鏃が切先を北東向きに副葬される。

鐔付直刀 35 刀身幅 4.2cm の直刀で、茎は茎尻に隅挟りが入るものとみられるがその先端を欠損する。目釘孔は 2 孔、柄元に挟りが入っていると思われるが、刀身から茎にかけて、鞘・柄木の木質が銹着するために明確でない。この直刀には、6 孔透かし窓の鐔が伴い、鐔と鞘口の木質を良好に残す。透かし窓の穿孔位置は極めて不均等であり、形・大きさ共に不揃いである。鐔縁辺に繊維が銹着しており、平織りの織物に接して副葬されていたことを示す。**鹿角装短刀 36** は刀身幅 2.2cm の短刀である。刃部には鞘の木質を両面に良好に残す。関は背関・刃関ともに角関でこへ幅 1.1cm の鐔が遺存し、皮革かと思われる有機質材が黒褐色の樹脂状蠟化膜として観察される。柄材が下地から表



第 8 図 明気 1 号墳 出土遺物 (1 : 3)

柄頭までの約4.5cm間に幅0.3cmほどの平たい圧痕が連続して鹿角装に残る。縫りの痕跡は見出せないことから、革紐などの有機質で巻き締めていたものと推測できる。柄先端（柄頭）は柄間よりもわずかに張出して、一体造りで柄頭を削り出していたものとみられる。**刀子 43**は茎先端をわずかに欠く。刀身幅は1.5cm、背関は斜関、刃関は角関、茎から鉤と思われる位置までは柄下地と思われる樹皮巻が見られ、柄縁の木質圧痕が0.9cm幅で残る。**斧 37**は鑄造刃部に鍛造袋部を取り付けた斧である。X線透過像から、刃部の長さは7.8cm、袋部との境に肩が確認できる。**鏃 38～42**は広根系・平造りの長頸鏃で、**41**が腸扶柳葉鏃であるほかは三角形鏃である。**38**と**42**は錆着しており、頸部関は棘関、矢柄の木質と口巻である樹皮巻が残る。**39**は同じ三角形鏃であるが関は角関である。

（4）明気4号墳

明気丘陵において最も標高の高い、中央部に位置し、南北方向に主軸をもつ埋葬主体部を1基確認している。

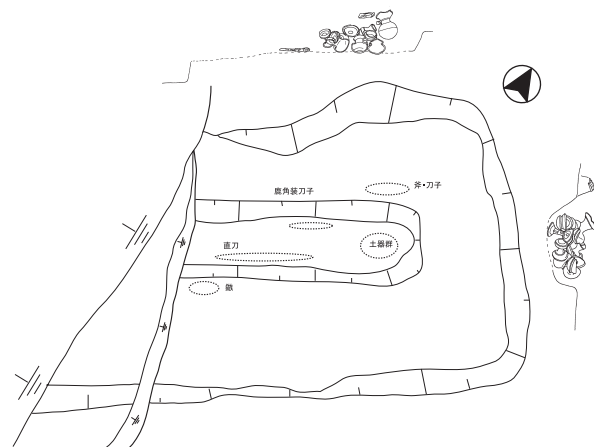
副葬土器は、すべて棺外、南北両木口に副葬されており、北群には須恵器杯身2・有蓋高杯2・長頸壺・台付長頸壺・甗・広口壺2・提瓶・土師器丸底甕3、南群には須恵器杯身蓋・広口壺・横瓶が置かれていた。これらの須恵器は、田辺編年TK43～TK209型式併行期に属するとみられ、6世紀後葉の築造が考えられる。

土器以外の副葬品として、棺内からは耳環1対と玉類が、棺外北木口の土器群下からは馬具、また棺外墓壇内から滑石製紡錘車が1点出土する。（大川）

素環鏡板轡 21 1号墳と同様のつくりの素環鏡板付轡である。1号墳のものに比して引手壺の屈曲角度は浅い。引手金具は筆者が確認できる範囲では、向かって左側の引手に4回の、右側には3回の振りがあるようである。（山中⁽⁵⁾）



第9図 明気2号墳・3号墳測量図（1：400）



第10図 明気2号墳埋葬施設 出土状況略図（1：60）

（報告②から作図）

耳環 19・20 はほぼ正円に近い耳環で、接面は隙間なく閉じられる。中空の銅地に巻き付けた金薄板をわずかに接面へ折り曲げ、X線透過像によると、接面には別材の薄板で蓋を被せていることがわかる。**勾玉 22～25**は瑪瑙製で、形状はいずれも厚みが極端に薄く、「コ」字状の角を丸めた程度の整形である。通有の明橙色のものから明橙色と乳白色とのマーブル色、まったくの乳白色のものと色彩は様々で、いずれも透明度は低く、玉髓（半透明で縞模様をもたない）に類する玉材である。**碧玉製 26**は、「C」字状の丸みを持たせて研磨されている。深緑色でわずかに灰緑色の縞が入る。**管玉 27**は細身でやや短めである。碧玉製で、縞のない単色部分を使用する。**ガラス小玉 28～36**はいずれも紫紺色の半透明である。管切で製作し、孔面も両面を研磨する。**紡錘車 37**は滑石製である。丁寧に研磨されており、端部以外は放射状や綾杉状に線刻が施される。端部に磨耗する箇所がある。

（5）明気7号墳

8号墳の南東の標高50m付近に造営される、東西方向に主軸をもつ埋葬主体部が確認されている。

副葬土器は、宝珠形ツマミがついた須恵器杯蓋と杯身が出土する。これらは田辺編年のTK217型式併行期に属すると考えられ、7世紀前半に造営されたとみられる。

土器以外の副葬品としては、耳環が1点のみ確認されている。

耳環 4 は接面をわずかに開く。銅芯に銀下地を巻き、鍍金される。下地材は接面中心部まで丁寧にたたみ込む。

(6) 明気 8 号墳

明気古墳群丘陵の東へ張り出した尾根頂部（標高 67m）に造営され、東西に主軸をもつ埋葬主体部が確認される。

副葬土器は、棺両端木口に土器群が検出され、東群には須恵器杯身蓋 3 セット、台付直口壺（蓋付）・提瓶・甕などが、西群には須恵器杯身蓋・台付直口壺（蓋付）・短頸壺などが副葬される。これらの須恵器は田辺編年による TK43 型式併行期に相当するとみられ、6 世紀後葉に造営された古墳と考えられる。

金属製品は、西土器群の棺木口側に鍬束と刀子が副葬されていた。

鍬 17 ~ 21 17 は広根系腸状柳葉形の鍬で平造りである。両端の逆刺を欠くものの、頸部関の棘関、茎に矢柄木質が銹着する。**18 ~ 21** は尖根系柳葉鍬で、頸部関は **18** が台形、他は棘関であるとみられる。**刀子 22** は短小で、背関は斜関、刃関が角関とみられる。茎には下地の樹皮巻と柄木質が銹着する。柄元には木質が銹着しており、接点を確認できないものの、**22-2** の柄元装具が装着されていたのではなかろうか。

(7) 明気 12 号墳 ~ 15 号墳

明気古墳群 A の丘陵から細長い谷を挟んだ南側で、明気窯跡群のある丘陵の西北端に 12 号墳 ~ 15 号墳がある。中学校の造成時にも須恵器等が出土し、この支群では土器副葬しかされていない。いずれも 7 世紀代に比定できる。12 号墳で短刀が 1 点出土しているが、12 号墳上には庚申塔や役行者像の石祠があったとされ、尾根頂部には浄土寺の墓地があったこと、遺物の関形状などから、近世墓（中世まで遡るか）に由来する可能性が高い。

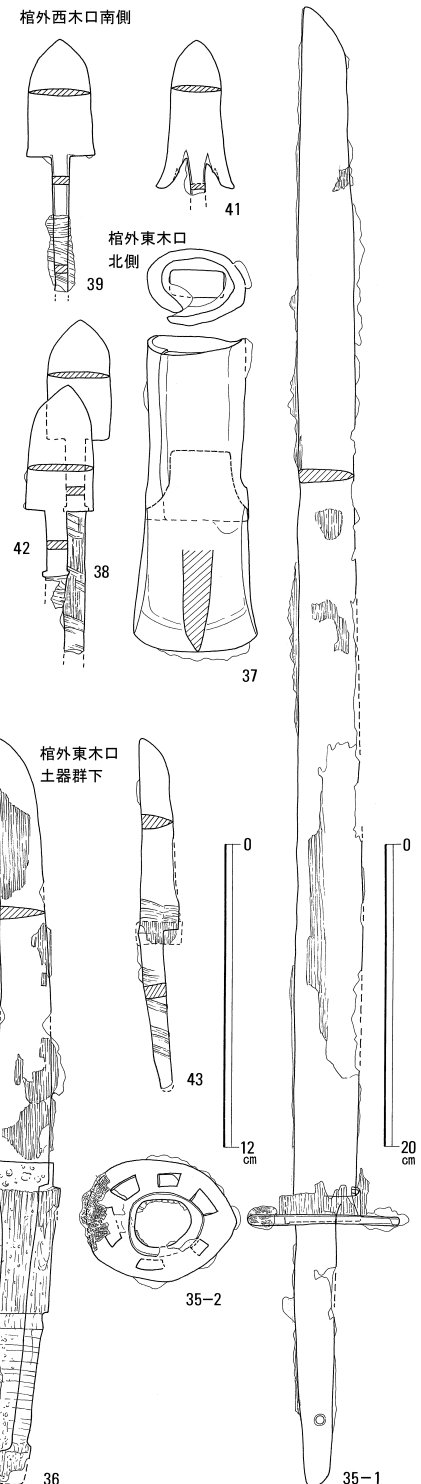
3 立岡山・明気古墳群の特性 ~ まとめに就いて

概観してきた未報告の資料と既刊報告の土器資料から、副葬品の様相を、近接する周辺古墳群と比較して見出せる特性を抽出してまとめたい。

(1) 石塚谷・大日山・倉懸古墳との副葬品諸相

当該地域で先行する立岡山 6 号墳における鍛冶関連の背景が注目される。後続する立岡山・明気・大日山・倉懸各古墳群へと展開する中で、全体的に工具の副葬は継続していく傾向があるが、武器の副葬が大日山・倉懸が立地する丘陵東部の古墳では、極めて小規模であり、武器・馬具・工具・装身具のすべてが象嵌大刀を出土した石塚谷へ集約された感があるのに対し、立岡山・明気の丘陵西部では武器の副葬が続いていく違いがみられる。そして、明気において素環鏡板の分布が集まるが、丘陵東部の石塚谷が見せる馬具の金銅装飾には至らない。

一方、装身具の保有状況に目を向けると、相対的には少量であるなか、丘陵東部に立地する石塚谷のガラス粟



第 11 図 明気 2 号墳 出土遺物 (36 ~ 43 1 : 3 35 1 : 5)

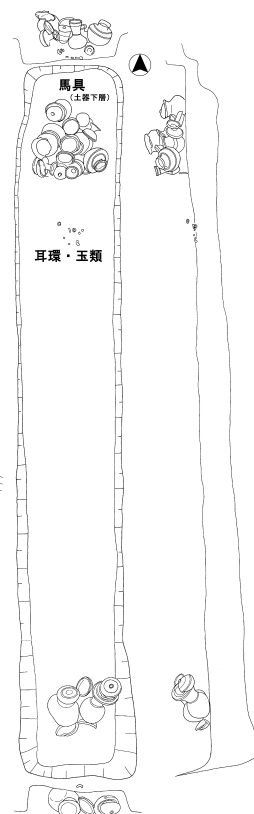
玉と水晶管玉といったコントラストの強い装身具の副葬に限定されるのに対し、明気ではガラス玉は小玉で極めて微量であること、勾玉を主として瑠璃、そしてポイント的に碧玉製の勾玉・管玉を組み入れる点など、河田古墳群との類似性も見受けられるが、耳環の保有数量と有機質素材の装身具を持たない点で河田と大きく異なる⁽⁶⁾⁽⁷⁾。伊勢の中南勢地域における当該時期群集墳を概観したときに、有機質素材の玉製品を保有する古墳群の多くでは石室を導入していく傾向がみられる中で、金属製品の副葬セットからうかがえる半島系様相を持ちながらも、立岡山6号墳(6世紀前葉)から倉懸・明気B支群(7世紀代)まで木棺直葬が続き、有機質装身具を保有する埋葬施設が一基もみられないことが当該地域の古墳群における特性の一つであり、被葬者および古墳造営の背景集団の特徴を表しているものと考えられようか。(大川)

(2) 素環鏡板副葬古墳の地域特性と地域間比較

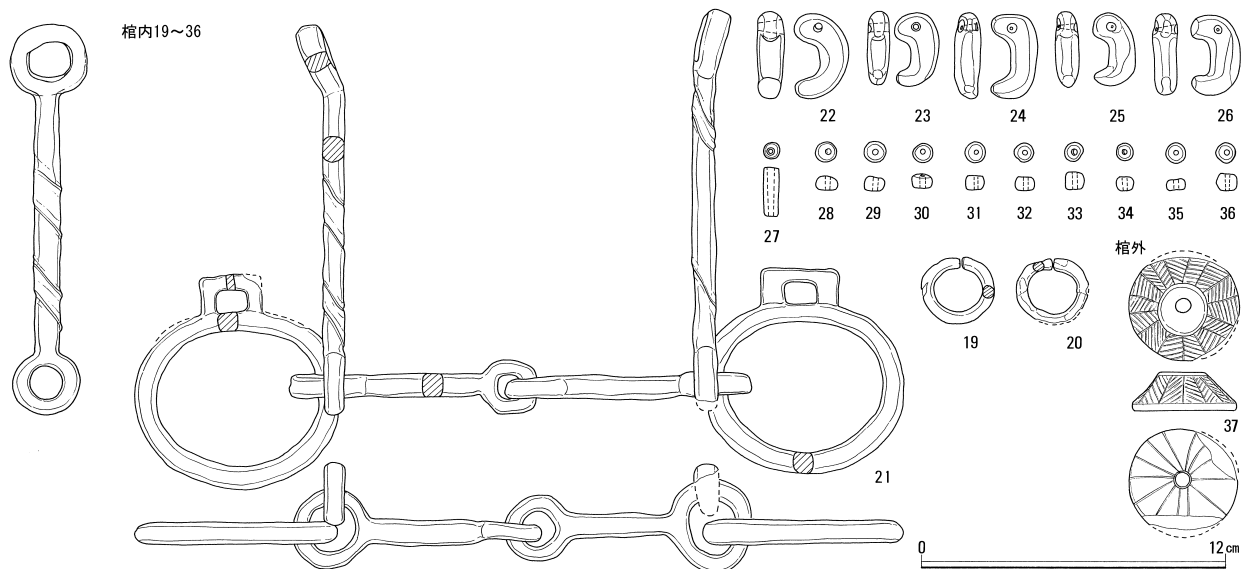
素環鏡板付轡は、三重県内では6世紀後半代以降に出土例が増える。その分布については、本稿で紹介した明気古墳群の位置する櫛田川流域に集中する。三重県内の馬具の出土は、鈴鹿川中流域、志登茂川・安濃川中流域(津市)、雲出川中流域、櫛田川流域、宮川と五十鈴川に挟まれた伊勢市域、木津川支流の伊賀市域の部分、同じく木津川支流である名張川流域(名張市域)に集中して見られる。5世紀後半代から馬具の出土が見られる鈴鹿川流域、志登茂川・安濃川中流域(津市)、雲出川流域、木津川支流の伊賀市域の部分とは異なり、櫛田川流域は6世紀と前掲の地域とは馬具の出現が遅れる。そして、櫛田川流域において6世紀後半以降見られる轡は全て素環鏡板付轡なのである。



第12図 明気4号墳測量図(1:600)



第13図 明気4号墳埋葬施設出土状況図(1:50)
(報告②に一部加筆)



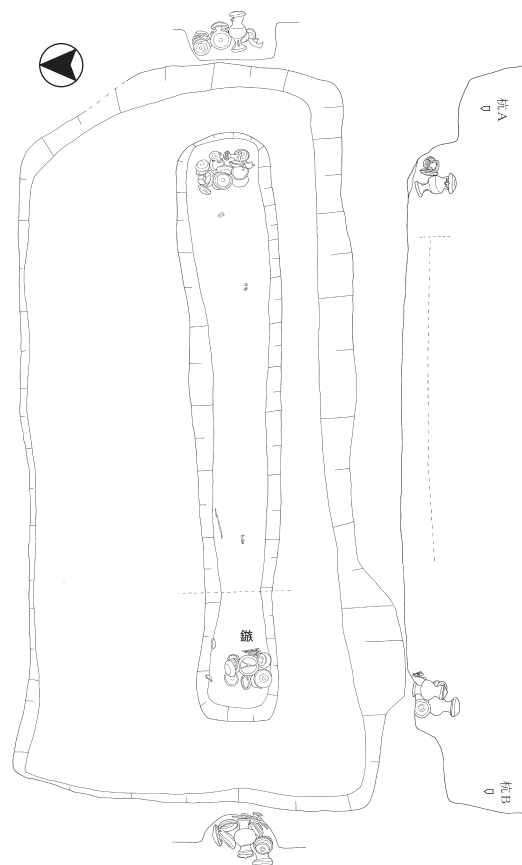
第14図 明気4号墳出土遺物(1:3)

鉄地金銅張鏡板を持つ轡と同時期に出土する素環鏡板付轡とは、その出土状況などから階層性があり、鉄地金銅張鏡板付轡の方が優位に立つことを指摘した⁽⁸⁾。しかし、三重県内において鉄地金銅張鏡板付轡の出土が減少し、素環鏡板付轡が主体となる6世紀後半代については、そのような比較検討は難しい。そこで、この馬具を持つ古墳の性格について考える手立てとして、馬具が実際に使用されたものなのかを検討する。筆者が実見した中で、馬具の補修痕や鉄の磨耗の状況を見ていくと、三重県内では鉄製板状鏡板付轡と素環鏡板付轡において補修痕や磨耗の状況が確認できる。本稿で検討した多気町内の馬具についても、河田 B2 号墳轡で磨耗痕が見られ、石塚谷古墳轡・鍔で修理痕が見られる。

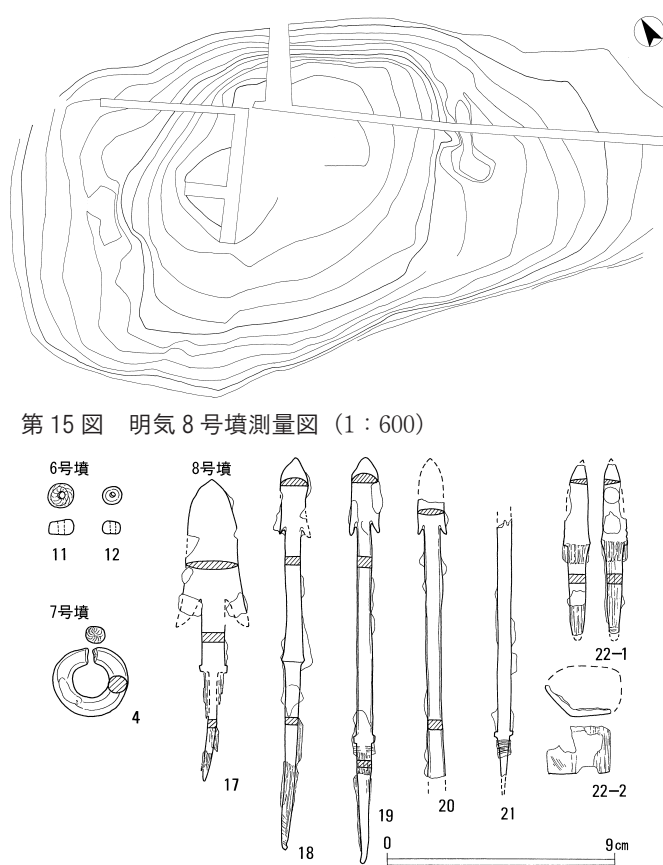
出土例が少なく、多気町内で出土する馬具について特徴を見出すことは難しいが、敢えて挙げるとすれば、多気町内の馬具は葬具としての馬具ではなく、被葬者の生前の持ち物としての意味合いを持って副葬されたものであるという点を指摘することができるだろう。(山中)

【註】

- (1) 既刊の報告は下記のとおりで、詳細はこれらを参照されたい。
報告①『立岡山中世墓群埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ多気ニュータウン相可台』1997年 多気町教育委員会
報告②『立岡山6号墳・明気古墳群埋蔵文化財発掘調査報告Ⅱ多気ニュータウン相可台』1998年 多気町教育委員会
報告③『石塚谷古墳・大日山1号墳・倉懸古墳群埋蔵文化財発掘調査報告多気工業団地』1998年 多気町教育委員会
- (2) 今回報告の資料には、各古墳ごとに既報告資料に続く番号で表記をしたが、報告②に記載された遺物もあり、保存処理により形状が変化したものについては新たな番号を与え、法量に変化しなかったものについては既報告番号で表記した。この場合、報告①掲載を「Ⅰ-O」報告②を「Ⅱ-O」とした。
- (3) 田辺昭三『須恵器大成』(角川書店 1981年)
- (4) 前稿「三重・古墳時代の馬文化」(『三重県埋蔵文化財センター研究紀要』第15-1 三重県埋蔵文化財センター 2006年)で報告しているが、その実測の際は引手の振りは確認できなかった。
- (5) 註(4)と同じ
- (6) 河田C・E支群における耳環は必須品目的に各埋葬施設に副葬され、また製作技法的にも多様性が認められる。同じく河田B支群においては耳環の数量もさることながら、鉛製・錫製など表装使用金属に特性が見出せる。こうした河田古墳群の特性は薬師谷・ヒジリ谷・中野山古墳群(津市一志町)においても見受けられ、素環鏡板の馬具との伴関係とも併せて注目できる要素である。
- (7) 河田古墳群ならびに薬師谷・ヒジリ谷・中野山古墳群(津市一志町)出土資料については多気町教育委員会・津市埋蔵文化財センターの厚意により資料実見の機会を得ることができました。記して感謝いたします。
- (8) 山中由紀子「横穴式石室出土馬具の基礎研究」(『立命館大学考古学論集』Ⅰ 立命館大学考古学論集刊行会 1997年)



第16図 明気8号墳埋葬施設出土状況図(1:60)
(報告②に一部加筆)

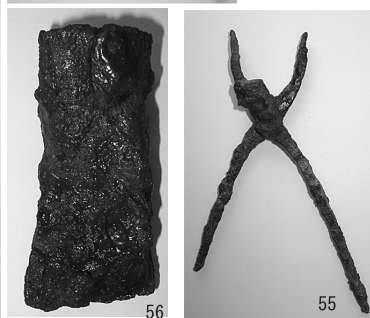
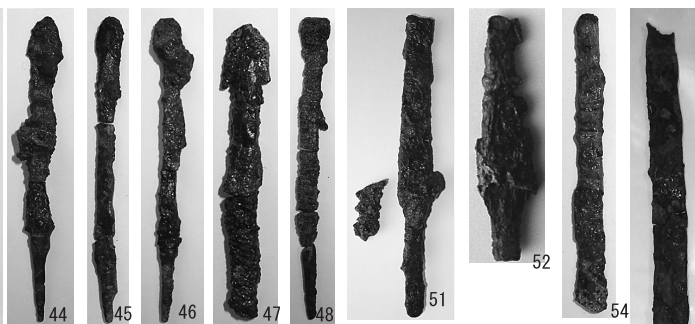


第15図 明気8号墳測量図(1:600)

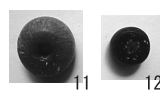
第17図 明気6・7・8号墳 出土遺物(1:3)



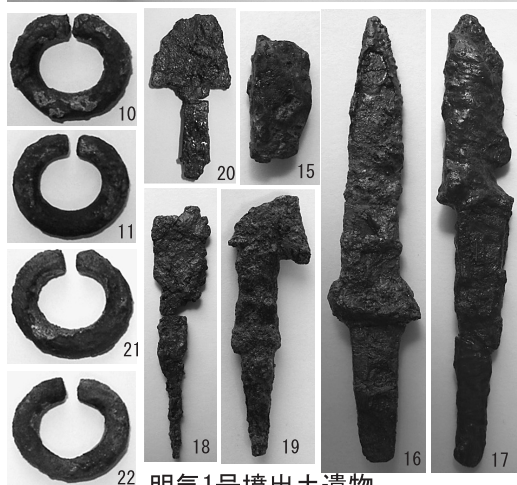
立岡山 6 号墳出土遺物



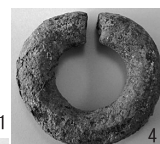
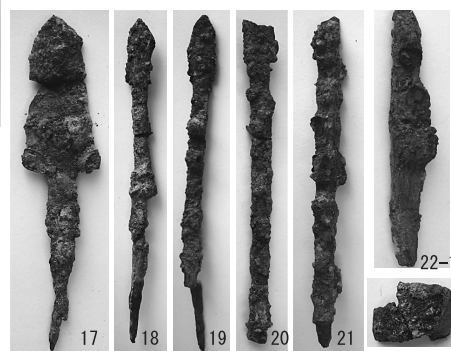
立岡山5号墳



明気6号墳

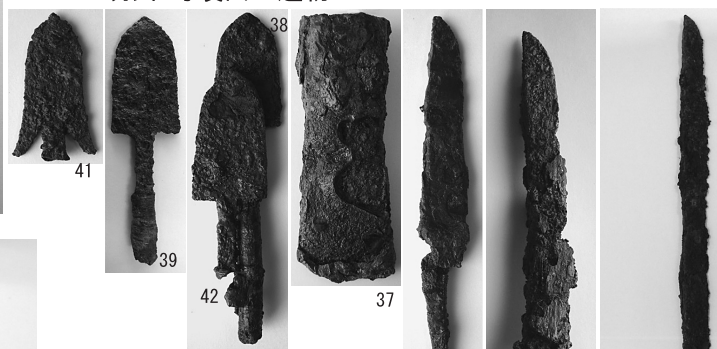


明気1号墳出土遺物

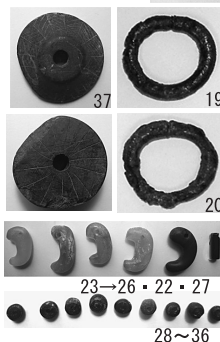


明気7号墳出土遺物

明気8号墳出土遺物



明気4号墳出土遺物



明気2号墳出土遺物

